

# 「文脈」を用いたエピソード記憶の行動課題の作成

## -行動実験と主観報告の統合アプローチ-

比較認知研究室 20L6002A 黒肱奈乃子

### 1. はじめに

過去の個人的な経験についての記憶は「エピソード記憶」と呼ばれる (Tulving, 1983)。エピソード記憶は、私たちがある出来事を、いつ、どこで経験したのかという出来事の内容に加え、その際にどのようなことを感じたか、考えたかなどの内的な要素も含む。ヒト以外の動物におけるエピソード記憶を調べる際には、言語を用いることができない。そのため、ヒト以外における動物では「いつ(When)、どこで(Where)、何が(What)起きたか」というエピソード記憶の行動的側面から検討されてきた。しかし、この方法ではエピソード記憶の重要な側面である心的な再構築について検証することができないため、エピソード記憶のうち行動的な側面の基準のみを満たす能力はエピソード的記憶と名付けられ、エピソード記憶と区別された。また、エピソード記憶の行動的な側面における「いつ(When)」については、それが絶対的時間を指すのか、あるいはどれくらい前に起きたことを指すのか、あるいはエピソード記憶に含まれる情報から推察されている可能性もあるなど、示されるところが曖昧であった。そこで、本研究では、エピソード記憶がある出来事が起きたときの物事の関係の情報を必ず含むべきであることから、文脈が不可欠な要素であると考え、エピソード記憶を測る行動課題として文脈を含んだ WWC 課題の作成を目的とした。大学生を対象に実験を行い、時本研究で提示した課題はエピソード記憶を測るのに十分に厳しい課題となっていることが示された。

### 2. 実験 1-2

#### 2.1. 目的

エピソード記憶を測る行動課題の作成を目的とした。

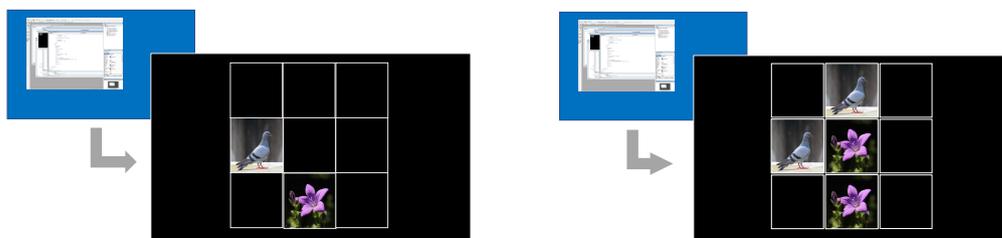
#### 2.2. 方法

被験者 大学生 9 名 (いずれも矯正視力正常)

手続き ハト画像がターゲットである視覚探索課題に取り組んでいる最中に、バグを装った画面が 2 度発生するという行動課題を用意した (図 1)。

参加者、9つの画像の中からハトの画像の位置に対応するナンバーキーを押すことで視覚探索課題を進めた。バグを装った画面の1度目をイベントとし、2度目をテストとした。イベントでは、バグを装った画面が呈示された後に、黒の背景画面に通常試行のターゲットであるハトとディストラクターである花の画像が呈示された。イベントでは、花の画像を押すと通常試行に戻ることができた。テストでは、同じ画像を2枚ずつ計4枚呈示された。テストでは、10回キーを押すと元の課題に戻った。エピソード記憶を利用した実験参加者は、イベント時の自らの行動を想起し、テスト時の行動に生かすことが予測された。

図1 実験画面

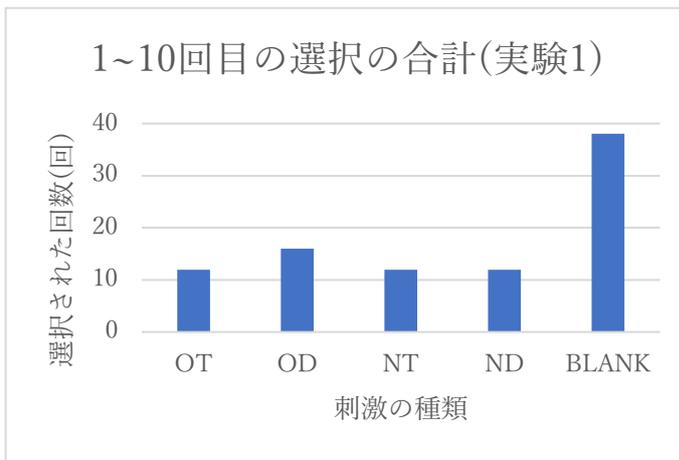


(左) イベント画面の例 (右) テスト画面の例

### 2.3. 結果

第一選択で花を選んだ参加者は一人で、多くがハトの画像を選んだ。1~10回目に選択された合計数では画像が呈示されていない空白が最も多く選ばれる結果となった。第一選択で花を選んだ参加者は、主観報告においてイベント時の自らの行動を思い出してテスト時の行動を行ったことを報告した。

図2 1~10回目の選択の合計(実験1)

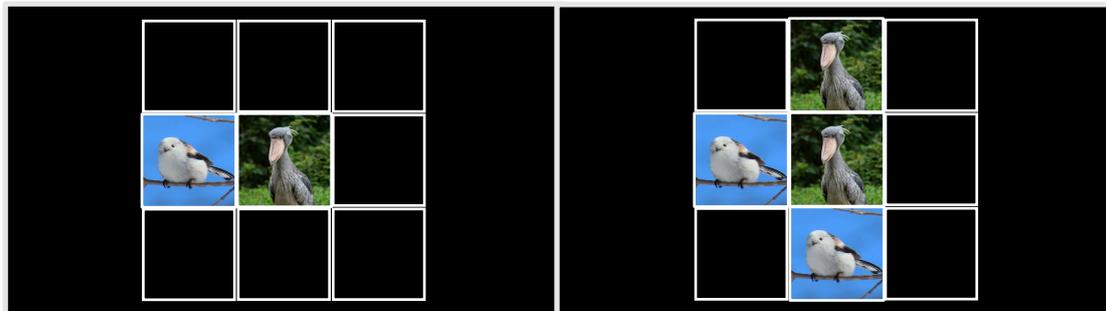


### 3. 実験 2

#### 3.1. 実験 1 からの変更点

実験 1 を受けて実験 2 を実施した。基本的な手順は実験 1 と同様であったが、イベント時とテスト時の画面を変更した。実験 1 では通常の視覚探索課題におけるターゲット画像であるハトをイベント時とテスト時のデストラクター画像として表示していたが、視覚探索課題に用いられていない画像に変更した(図 3)。

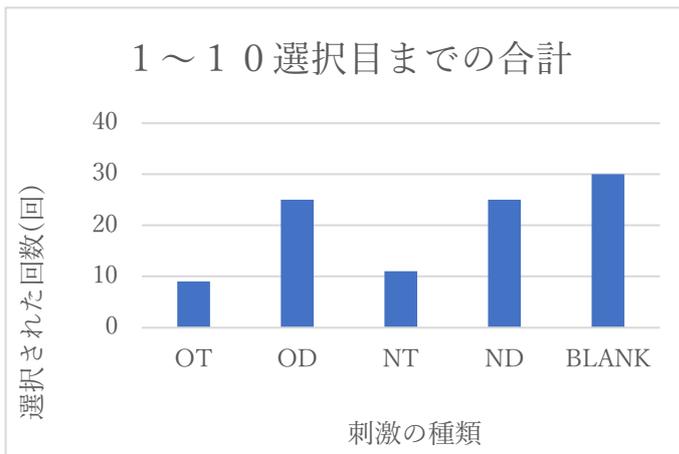
図 3 実験 2 のイベント時とテスト時の画面



#### 3.2. 結果

第一選択でイベント時のターゲット画像を選択した参加者は一人で、この参加者は主観報告でエピソード記憶を用いてテスト時の行動を決定したことを報告した。多くの参加者が第一選択にブランクを選んだ(図 4)。

図 4 1~10 回目の選択の合計



#### 4. 自伝的記憶の測定課題

行動実験では、合わせて主観報告をとった。これは、行動課題で示された結果がエピソード記憶を介して導かれた行動であるかどうか、調べるためであった。自伝的記憶の測定課題を用いて、エピソード記憶についてより信頼度の高い主観報告を得る方法を検討した。

#### 5. 総合考察

エピソード記憶を測る行動課題として WWC 課題の作成を目的とし、WWC 課題においてエピソード記憶の重要な特徴である心的な再生を図ることができるかについて、主観報告を用いて検討した。

はじめに行った行動実験では、イベント場面をエピソード記憶として保存し、テスト時に用いた参加者は限られたが、主観報告から心的な再生を伴う出来事の記憶を評価するのに十分に厳しい課題になっていると言える結果を得られた。言語報告を得られないヒト以外の動物や幼児といった対象に対しても、WWC 記憶課題を用いて、同様の結果が得られた場合、従来のエピソード記憶を図る行動課題では調べることができなかった心的な再生という側面の評価につながる可能性がある。

また、本研究では行動課題終了後に主観報告をとることで、行動課題で示された結果が実際にエピソード記憶を介して導かれたものだったのかどうかを調べた。この主観報告について、より信頼度の高いものにするため、自伝的記憶質問紙を用いたエピソード記憶を評価する方法について検討した。自伝的記憶研究の対象とエピソード記憶研究の対象の違いを踏まえ、変更を加えた上で、応用可能である可能性が高いと考えられた。